

# 目次

御法	夕霧	鈴虫	横笛	柏木	若菜下	若菜上	藤裏葉	梅枝	真木柱	藤袴	行幸	野分	篝火	常夏	螢	胡蝶
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一〇八	一〇〇	一九七	一九四	一八九	一八〇	一七〇	一六六	一六三	一五八	一五五	一五一	一四八	一四六	一四二	一三九	一三五

年立	系図	夢浮橋	手習	蜻蛉	浮舟	東屋	宿木	早蕨	総角	椎本	橋姫	竹河	紅梅	匂宮	雲隠	幻
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
三〇四	三〇二	二九八	二九一	二八四	二七三	二六五	二五四	二四九	二三九	二三三	二二六	二二〇	二一八	二一六	二一五	二一一

花散里	賢木	葵	花宴	紅葉賀	末摘花	若紫	夕顔	空蟬	帚木	桐壺	凡例
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
七二	六三	五六	五三	四七	四一	三一	二四	二二	一一	五	一

初音	玉鬘	少女	朝顔	薄雲	松風	絵合	関屋	蓬生	滯標	明石	須磨
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
一三一	一二五	一一八	一一四	一〇〇	一〇六	一〇三	一〇一	九七	九一	八四	七四



桐壺の帝は多くの妃たちの中で更衣ひとりを愛したので、更衣はほかの妃たちの恨みを買ひ、心労から病気がちであったが、前世からの深い因縁によるのか、玉のように美しい皇子を産んだ。帝は一時も早く見たいと思ひ、急いで参内させ、桐壺(淑景舎)で皇子とはじめて対面した。庭には桐の花が咲いていた。帝は美しい皇子を見て東宮にしたいと思ふ。

## 1 凡例

## 凡例

- 一、本書は絵によって一般の読者が、『源氏物語』を理解しやすくなるように作られている。
- 一、本書の絵は、東京大学文学部国文学研究室蔵、慶安三年跋承応三年版、六十卷六十冊本『源氏物語』を底本に、欠本の須磨の巻は鶴見大学付属図書館蔵、同刊記本で補い、その全挿絵二二六図(見開き挿絵九図を含む)を抜き出したものである。
- 一、本書だけでも物語が理解できるように、物語の梗概と挿絵説明を加えた。
- 一、巻末に主要登場人物の系図と光源氏一統の年譜をつけ、物語の流れを知ることができるように配慮した。

一、梗概と挿絵説明は、

日向一雅(桐壺・藤裏葉)

篠原昭二(若菜上・竹河)

鈴木日出男(橘姫・夢浮橋)

が分担して執筆した。

# 桐壺

平安時代の中ごろ桐壺の帝の後宮には多くの女御や更衣が仕えていたが、帝はその中でもあまり身分の高くない更衣を格別に寵愛した。更衣は父の大納言を早く亡くし、ほかに頼りになる後見もいなかったが、父大納言の遺言によって宮仕えに出たのである。ふだんの宮仕えは母の行き届いた世話でほかの華やかな女御たちに比べても見劣りすることもなかったが、何か改まったことのあるときにはやはり心細げであった。そのような更衣を帝は深く愛した。だが帝の愛が深ければ深いほど、更衣はほかの女御たちの恨みを買ひ、心労から病気がちとなり、里に下がることも多かった。そうなるとますます帝の愛は募り、世間の非難を受けるほどになった。そういう二人の前世からの因縁が深かったせいか、更衣はやがて玉のような美しい皇子（光君）を産んだ。

帝にはすでに右大臣の娘の弘徽殿女御腹の第一皇子がいたが、光君の美しさには比べようがなかった。帝は光君を秘蔵子とし更衣への扱ひも重々しさを加えたので、弘徽殿女御はわが子第一皇子をさしおいて光君が東宮になるのではないかと恐れ、前にもまして更衣を迫害した。光君が三歳の年、帝は第一皇子に劣らず盛大に袴着の式を行ったが、その年の夏、更衣は積年の病弱からついに逝去した。帝は更衣に三位を追贈してその死を悼んだ。

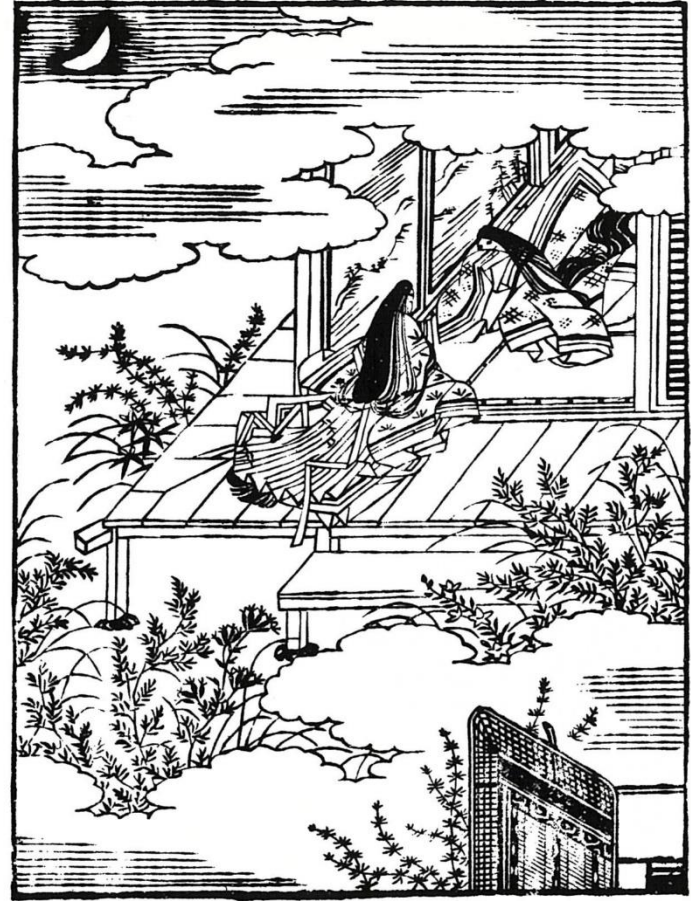
更衣を亡くした帝の悲しみは深かった。野分の吹くころの夕月の美しい晩、帝はいつもより更衣が恋しくてならず鞍負命婦を更衣の里に遣わした。更衣の母北の方も荒れた屋敷で悲しみにくれていた。

北の方は鞍負命婦と更衣の生前をしのんで語りあかし、更衣の形見の衣服や髪上げの道具などを帝への贈り物とした。帝はそれらの形見の品を見て、中国の玄宗皇帝が非業の死をとげた楊貴妃の靈魂のありかを捜させて証拠のかんざしを得たという長恨歌の故事になぞらえて悲みを新たにした。

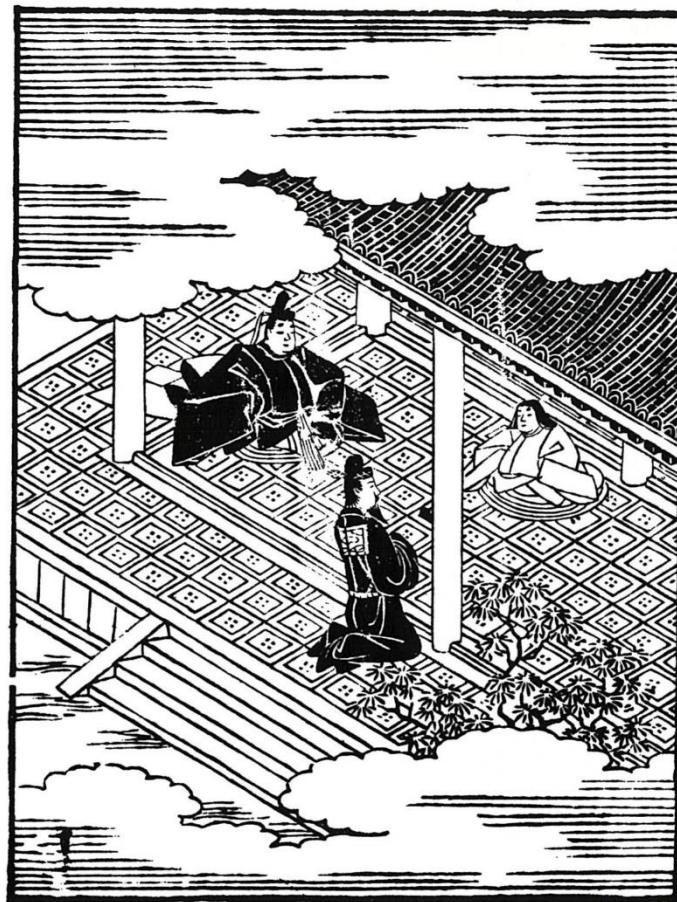
光君四歳の年、第一皇子が東宮に立った。六歳の年には祖母が亡くなり、光君は父帝しか頼る者のない身の上となる。七歳で読書始めの儀を行うと、以降、学問や音楽をはじめ光君の才能は世を挙げて驚嘆の的となった。ひそかに光君を東宮にしたいと思っていた帝は、そのころ来朝した高麗の相人に光君の相を占わせた。相人は光君には帝王の相があるが、帝王になると乱憂が起ると言い、しかし、臣下の相ではないと占った。この観相に基づいて、帝は光君を臣籍に下し源氏とした。光君を皇位継承権を持つ親王としておくことが、右大臣・弘徽殿方との政治的な争いの種となることを帝は恐れたのである。臣下としてその優れた能力を発揮させることが彼のためであると帝は考えた。帝はいつまでも更衣を忘れかねていたが、先帝の皇女の藤壺を迎えてからしだいに悲しみも紛れていった。藤壺が更衣に生き写しであったからである。帝はまた光君と藤壺を引き会わせて二人を親しく交わらせた。二人の美しさを世間では「光る君」「かかやく日の宮」と讃えた。十二歳で源氏は元服し、左大臣の娘の葵の上と結婚した。無論、帝もこの結婚に賛同していた。特に左大臣にはこの結婚によって右大臣家の勢力をしのぐという政略的意図もあった。だが源氏は年上の葵の上とうちとけられず、心中ひそかに藤壺を理想の女性として思慕していた。



月が沈みかけるころ、鞍負命婦は宮中に帰ったが、帝はまだ就寝にならず壺庭の草花を眺めて、女房たちとひそやかに話をしていた。帝はこのごろは長恨歌や長恨歌絵などの話題に明け暮れていた。命婦は母君の悲嘆の様子を奏上し、また更衣の遺愛の品々を預かってきた。母君の手紙には光君の身の上が案じられるとあった。それらを見て帝は悲しみを新たにした。



野分が吹き急に肌寒くなった夕暮れ、帝は亡き更衣の恋しさに堪えかねて鞍負命婦を更衣の里に遣わした。月の美しい夜であった。庭は草が高くなり荒れた感じであった。命婦は南面で車を降り簀子に上がった。母君は涙を拭いながら帝からの勅書を開こうとした。勅書には更衣を忘れえないこと、光君のことが気がかりでならぬ旨が記されてあった。



源氏七歳のころ、高麗人の相人が来朝した。帝は源氏を右大弁の子のよう  
に見せて鴻臚館こうろかんに連れて行き、源氏の相を占わせた。相人は源氏には帝王  
の相があるが、帝王になるとすると乱憂が起ると言い、しかし、決して臣  
下の相ではないと言って、源氏の相の不可解さをいぶかしがった。三人は  
漢詩を作り交し、相人は源氏の才能を讃えた。